

知的障害のある児童生徒が社会の一員として主体的に参画する学習の開発

—コンビニエンスストアでの製品販売を考える—

Development of Learning for Students with Intellectual Disabilities to Actively Participate as Members of Society

—Consider selling products at convenience stores—

長尾 亮¹, 須本良夫², 池谷尚剛³

Nagao Ryo¹, Sumoto Yoshio², Naotake Iketani³

[キーワード Keyword] 特別支援教育, 社会に開かれた教育課程, キャリア教育, 作業学習, カリキュラムマネジメント

[所属 Institution] ¹岐阜大学教育学部附属小中学校 (Gifu University Faculty of Education Affiliated Compulsory School System Elementary-Junior High), ²岐阜大学教育学部 (Faculty of Education Gifu University), ³岐阜大学教育学部 (Faculty of Education Gifu University)

[要旨 Abstract] 岐阜大学教育学部附属小中学校特別支援学級では、令和3年2月より、ミニストップ岐阜城東通店と岐阜大学店において作業製品の販売活動を行っている。本校の「どう生きる科」と作業学習をハイブリッドに結ぶ形で、コンビニエンスストアを社会とつながる場としてカリキュラムに位置付けた。知的障害のある児童生徒が、作業製品の企画・製作・納品・販売・在庫管理・売上の受取といった一連の流れを体験的に学習することで、リアルな社会とのつながりを実感し、社会参画を目指すことができる。社会に生きる人と関わる場を設定し、児童生徒が学習の進め方を決定する学習カリキュラムを開発し、自分自身を見つめ自己決定するための目標設定を行うことによって、児童生徒の自己肯定感を養い、働く自分としての自己の確立と資質能力の育成を目指した。本論文では、これからの社会を創る担い手として期待されている知的障害のある児童生徒が、コンビニエンスストアでの製品販売に向けた活動を通して、社会の一員として主体的に参画する研究実践について報告する。

1. はじめに (問題の所在)

平成30年の特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編 (幼稚園・小学部・中学部) では、今の子どもたちが社会で活躍する頃には、「社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。-中略-一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを共なった個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。(1)」としている。また、これからの時代求められる教育を実現していくためには、社会に開かれた教育課程を通して、より良い学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有することが求められており、学習の効果の最大化を図るカリキュラムマネジメントを確立させることの大切さが解説されている(2)。

岐阜大学教育学部附属小中学校でも、新領域「どう生きる科」を新設し、探究テーマについて自己のあり方を見つめながら、教科横断的に学び、予測困難な未来を自分らしく生きるための資質・能力を育むことを目指している(3)。

知的障害のある児童生徒もこれからの社会を作る担

い手として期待され、あらゆる困難を乗り越えて社会に参画する力が求められている一方で、社会の担い手となるためのキャリア教育の進め方には課題が残っている。松永(2017)(4)は先行研究から、障害者のキャリア形成について、生活経験が限られていることや失敗経験の積み重ねが、自らの人生を創造するための意思決定を回避する傾向を生み出し、自己肯定感の低下を招いていることを指摘している。また、北村(2016)(5)は、これまでにキャリア形成の基盤となる力を育成するための方法が報告されているとしながらも、具体的な技能の習得のみならず、児童生徒個人の意欲や興味関心に配慮した支援方法の充実が求められているとしている。

実際の社会は多様化、共生、ユニバーサルデザインなどこれまでとは異なる価値の承認へと少しずつではあるが移行している。特別支援教育への理解も進んできており、本校の特別支援学級の児童生徒による作業製品の販売会では、学校関係者やPTAなど多くの方に見守られ、児童生徒は充実感を味わうことができた。特別支援学校の中学部段階における職場体験活動や高等部段階における就業体験では、現場で働くことを通

じて、社会とのつながりや将来の自分の生き方について学ぶことを目指してきた。しかし、このような特別支援学級の児童生徒のために用意された社会への参加だけで、予測困難な時代を自分らしく生きることができのだろうか。知的障害のある児童生徒においても、自分で考え、行動し、自分らしく未来を切り開くことができる力を育成する必要がある。

したがって、社会とのつながりを感じながら、問題解決に向けて、主体的に考え行動する学習カリキュラムを創造し、特別支援学級で学ぶ児童生徒が「社会の一員として生きていくのだ。」という実感を伴った力を養っていくことが必要だと考えた。

こうしたカリキュラムが実現できれば、児童生徒が自身の生き方を考える際や、進路選択の場面において自己選択や自己決定をし、願いを自身の行動に移す力を育てることができると考えた。このような実践を繰り返すことで、知的障害を持つ児童生徒が社会の一員として、主体的に参画する姿につながると考え、本実践を行なった。

2. 岐阜大学教育学部附属小中学校特別支援学級について

2.1 岐阜大学教育学部附属小中学校特別支援学級の願う姿

岐阜大学教育学部附属小中学校⁽⁶⁾（以降は附属小中学校と表記）は、小中一貫の義務教育学校であり、特別支援学級も通常学級同様、Ⅰ（1～4年生）・Ⅱ（5～7年生）・Ⅲ部（8・9年生）の体制である。創設の際に、周囲の環境と関わりながら主体的に生活していく姿を目指して、より一貫して支援に当たることができるように、将来にわたって願う姿を以下のように設定した⁽⁷⁾。

願いをもって、自分から精一杯活動し、周囲の人たちとかかわることを有益だと感じながら新たな体験をしたり、自分の好きなことを追究したりする主体的な生活

2.2 これまでのカリキュラム（作業学習を中心に）

作業学習についてH29特別支援学校学習指導要領⁽⁸⁾では、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事項を総合的に学習することや、生産から消費への流れと社会的貢献などが理解されやすいものであることが強調されている。本校においても、将来の自己実現に向けて、自分や誰かのために働くことの良さに気づき、将来の職業生活を見据えて基盤となる力を身につけられるように学習を進めてきた。

本校特別支援学級7～9年生は、作業学習をカリキュラムの中心に据え、週に7時間を設けている。1年

間を通じて製品作りを行っており、PTA等からの受注を受けた製作・販売を行うとともに、年度末には保護者・生徒向け校内販売を行ってきた。児童生徒は、学習のまとめとなる販売活動で、お客さんの喜ぶ姿を見て、自分の頑張りについての成就感を得ている。学習の中では、働くための心構えやマナー、仲間との関わり、お客さんのために取り組むことを大切にしてきた。教科の学習では、より生徒の生活との関わりが深い内容を取扱い、個別の目標を設定し学習を行ってきた。

2.3 附属小中学校特別支援学級の現状

附属小中学校特別支援学級の現状について、作業学習での児童生徒の姿を中心として、良い所と今後の課題を捉え、整理した。

- 製品作りに取り組む意欲が高く、作業学習は、生徒が最も大切にしている活動である。
- あいさつや身だしなみ、仲間と協力することなど、将来働くために必要な力が備わってきた。
- 指示されたことや任されたことを、一生懸命最後までやり抜くことができる。
- 生活や学習における成功体験が少なく、自己肯定感が低い生徒が多い。
- 自己選択や自己決定をする経験が少なく、学習が受け身になってしまうことが多い。
- 製品を作ってから、販売をするまでの時間が長く、生徒の経験が断片的になりやすい。そのため、相手意識が希薄になりやすく、自分自身の行動に責任をもつことができない姿がある。
- コロナ禍のため、販売の回数が制限されており、生徒の頑張りが評価される機会が少なくなっている。

2.4 目指したいカリキュラム

附属小中学校においても社会とのかかわりは設定された行事や販売のみに限定されており、用意された社会の中で、児童生徒一人一人の意思決定を伴わず活動が行われた結果、前項のような課題が浮き彫りになっていると考えられる。リアルな社会を体感できる経験の不足は、コロナ禍では、本校だけでなく多くの特別支援学級や特別支援学校の抱える課題ともいえる。

そこで、新領域の「どう生きる科」と作業学習をハイブリッドに結ぶ形で、リアルな社会を学校カリキュラムに位置付けることができないかと模索した(図1)。

今までの作業学習を中心としたカリキュラムに、社会からの販売の提案を位置付ける。学習の主体者である児童生徒は、探究活動を通して自分の生き方を見つめる「どう生きる科」において、願いを出しあい、活

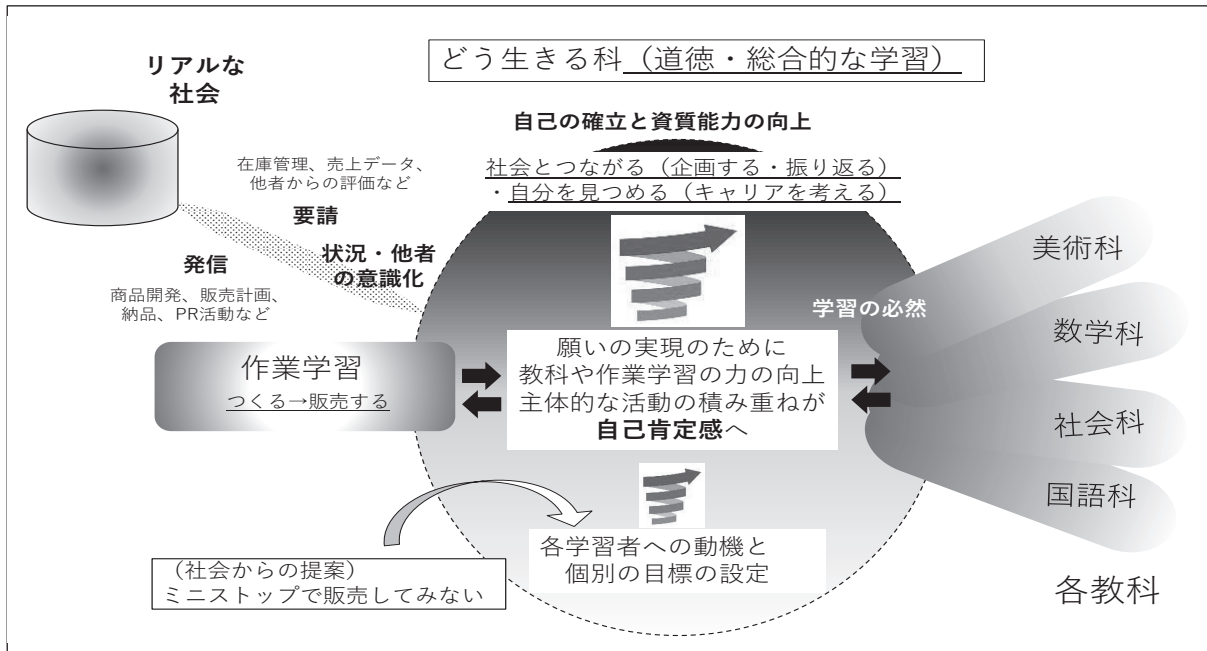


図1 社会と関わりながら主体的な社会参画を目指すカリキュラム

動計画を立案する。

児童生徒は、願いの実現に向けて学習課題を設定し、作業学習で製品作りに取り組み、リアルな社会に対して、販売活動という形で発信する。販売活動を続けることで、他者からの評価や売り上げデータを得ることができる。これを社会の要請として捉え、児童生徒の学習に還元することで、社会状況や他者を意識した活動を行うことができる。児童生徒は社会の要請に応えようと、新たに学習課題を設定し、解決するために学習を進める。願いの実現に向けた学習計画を考える際には、児童生徒自身が、各教科における学習の必然を感じたり、作業学習における自分の取り組む姿勢を向上させる必要があることを自覚したりする。そして、各教科や作業学習においてつけた力を発揮して、再びリアルな社会に発信するという流れで学習活動を進める。このようにリアルな社会と関わりながら主体的に学習活動を繰り返すことが自己肯定感の育成につながり、社会参画する力につながるのではないかと考えた。そんな折に、岐阜大学から大学敷地内に出店するミニストップでの販売活動の提案を受け、実現する運びとなった。

3.社会とつながる場の設定 (教材性について)

3.1ミニストップ販売の概要

ミニストップでの販売は岐阜大学店と岐阜城東通り店の2店舗で行っている。販売に至るまでの工程と児童生徒の活動は、次の通りである。

- ①製品の企画→②製品の制作→③陳列方法の検討→④各店舗への納品→⑤在庫管理・売上の受取→①

①製品の企画では、どんな製品を作るか、どのようなデザインにするかを考える。⑤の売上の傾向や他者の評価から、お客さんはどんな製品を喜んでもらえるかを考え、次の製品について考えるもととする。

②それぞれの作業班の特性を活かした製品を製作する。製品と取扱説明書と製品PRの紙を袋詰めし、販売用のバーコードシールを貼り、納品の準備をする。

③陳列方法の検討では、どの場所にどの製品を置くか、どのように置くかを考える。商品棚の使い方は学校に一任されており、作業の活動紹介の看板やプライスカード等も作成する。

④⑤各店舗への納品の際には、まず在庫個数を確認する。商品棚にいくつ製品が残っているか確認し、売れた個数を計算する。次に、新製品の追加をしたり、在庫の補充をしたりする。最後に、売上個数に基づき、前月の売上金額を受け取る。

3.2 ミニストップ販売の魅力

コンビニエンスストアでの販売活動の魅力について、次のように捉えている。

- 生産者や販売者として、①企画→②製作→③納品→④販売→在庫管理→売上の受取といった、社会における販売活動の一連の流れを理解し、責任感をもって活動に取り組むことで、社会参画する基盤を養うことができること。
- 様々な関係者や消費者と関わり、実社会とのつ

ながりの中で、生徒が相手意識をもって活動し、成就感を得ることができること。

- 附属学校が商品棚の陳列の仕方や販売商品を決めることができ、継続的な販売活動を通して、より良い販売になるように、生徒たちが主体的に創意工夫をし続けることができること。
- 販促のための掲示の作成や在庫管理や売上の計算など、教科横断的な学習を仕組むことができること。

以上の理由から、活動を通して体験的に学ぶ知的障害の児童生徒にとって、コンビニエンスストアでの販売は、リアルな社会とのつながりを実感し、社会参画を目指す学習教材としてふさわしいと考えている。

4. ミニストップ販売を通した願う姿の明確化

学習指導要領等における現在の児童生徒に求められる力、本校の児童生徒に願う姿に照らし合わせて、ミニストップ販売を通した願う姿を決め出した。この願う姿は、小中学校段階における学習に臨む姿だけではなく、将来社会生活の中で発揮する姿のことを指している。

社会の一員として主体的に参画する姿は、学校の場面に置き換えると、願いに基づいて主体的に学習に取り組み、自分自身の力で仲間と共に学校生活を上げる姿である。社会生活の場面で置き換えると、社会の一員としての自分の役割の意味を理解し、毎日の生活に生きがいを感じながら、豊かに生活する姿である。

社会の一員として主体的に参画するためには、附属小中学校が目指す4つの資質・能力が必要だと考える。

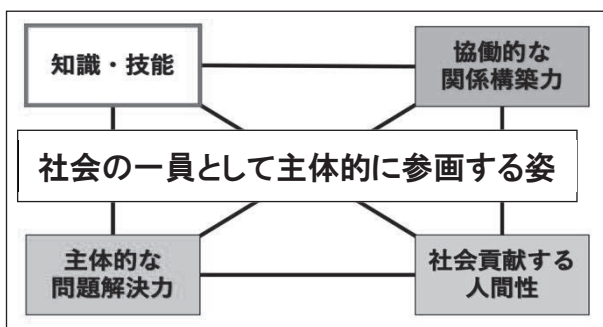


図2 願う姿と本校で育む4つの資質能力

○知識・技能

・製品の製作から販売までの流れや、お客さんのためになる行動を理解することができる。

○主体的な問題解決力

・願いの実現に向けて自己選択・自己決定をし、試行錯誤しながら行動することができる。

○協働的な人間関係構築力

・仲間と共に活動に取り組む良さを感じて、相手や場面にあった言動をすることができる。

○貢献する人間性

・自分と社会とのつながりを感じて、願いの実現に向けて、責任感をもって活動に取り組むことができる。

5. 願う姿に迫るための方途

5.1 社会に生きる人と関わる場の設定

ミニストップへの毎月の納品や在庫管理、売上の受取を通して、継続的に販売に携わることで、自分たちの活動が、常に社会との接点を持ち続け、多様な人々とのつながりを感じながら学ぶことができる。生活の範囲や相手が限定されやすい知的障害がある児童生徒にとって、社会に生きる人と関わり、認められることで自己肯定感を養うことにつながる。社会参画の第一歩として、意図的に社会に生きる人とのつながりを位置付けることとした。

5.2 児童生徒が意思決定する学習カリキュラム

これまでの学習活動は、教師が主導してきた。教師が活動の目的を説明し、取り組む内容を具体的に決め、様々な手立てを講じ、教師が決めた目指す姿を体現しようとする児童生徒の姿を価値づけてきたことで児童生徒一人一人に目指す目標に応じた力がついてきた。一方で、「言われたことは一生懸命できるけど、状況に合わせて自分で考えて行動することが難しい。」という課題は、教師主導の学習活動の弊害ではないだろうか。

ミニストップ販売を始めるにあたり、「社会の一員として主体的に参画する姿」を願った時に、学校生活の中でも児童生徒の主体性を尊重した学習を行なっていく必要があると考えた。どのような願いをもって、どのような学習を行うかを、児童生徒が決定する。課題に直面した時や、学習の進め方を決める時に「どうする？ どうしてそう考えたの？」と問うことで、主体的に社会に参画するための力をつけたいと考えた。

願いの実現のためには、様々な学習や活動が必要になる。作業学習やどう生きる科と共に、教科別の学習を関連付けて行うことによって、学習内容を充実させることを目指した。

5.3 自分を見つめ、自己決定するための目標設定

願いの実現に向けて主体的に取り組む中で、自身の活動への取り組み方について振り返る時間を設ける。本校の児童生徒の特性として、活動に取り組む意欲が

あっても、願いの実現のためには自分自身がどのような行動をするとよいか考えることにはこんな差がある。したがって、自分たちがどのような行動をするとよいかを考える学習活動を設定した。

作業学習においては、次のように願いとその実現のための具体的な目指す姿を作成した。(図3)

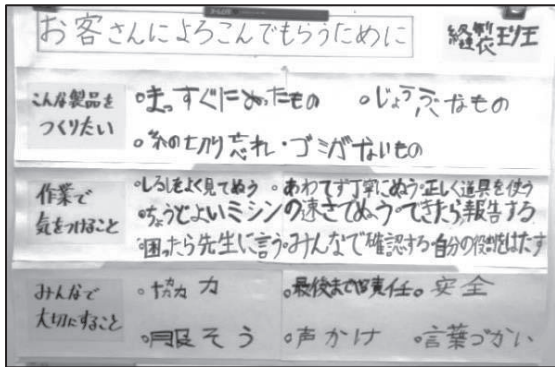


図3 縫製班が作成した目指す姿

3つの作業班で共通する願いは「お客さんに喜んでもらう」ことである。そのためにどんな製品を作るのか、そのために作業で気をつけることは何か、みんなで大切にすることは何かを作業班ごとに話し合った。

これらの目指す姿は、作業室に掲示し、生徒が作業学習に取り組む際に、自分や作業班としての目標を設

定する時に用いる。作業学習の活動が始まる前に、ネームプレートを貼り付け、今日の自分の目標を設定し、活動を行う。そして、作業学習の最後には、この目指す姿を用いて自分の目標が達成できたか、仲間の活動にどんな良さがあったかを振り返るようにしている。

繰り返し活動し、見通しをもって取り組むことができる作業学習だからこそ、また、社会とつながっていることを児童生徒自身が理解しているからこそ、毎回の目標を目指す姿の中から選び、自己決定して取り組むことができる。願いの実現に向けた行動の仕方が明確になることで、知的障害のある児童生徒が自己決定し、主体的に学ぶことができるようにしている。

6. 実践「ミニストップ販売に向けて」の実践

6.1 「ミニストップ販売に向けて」学習の流れ(図4)

6.2 単元の初めの生徒の意識

児童生徒たちに「大学の先生方から、作業製品をミニストップで販売してみないか？」と提案されたことを伝え、「みんなはどうしたい？」と問うと、次のように答えた。

- ・本当のお店で売ってもらえるなんて嬉しい！
- ・自分もミニストップに買いに行ってみたいな。

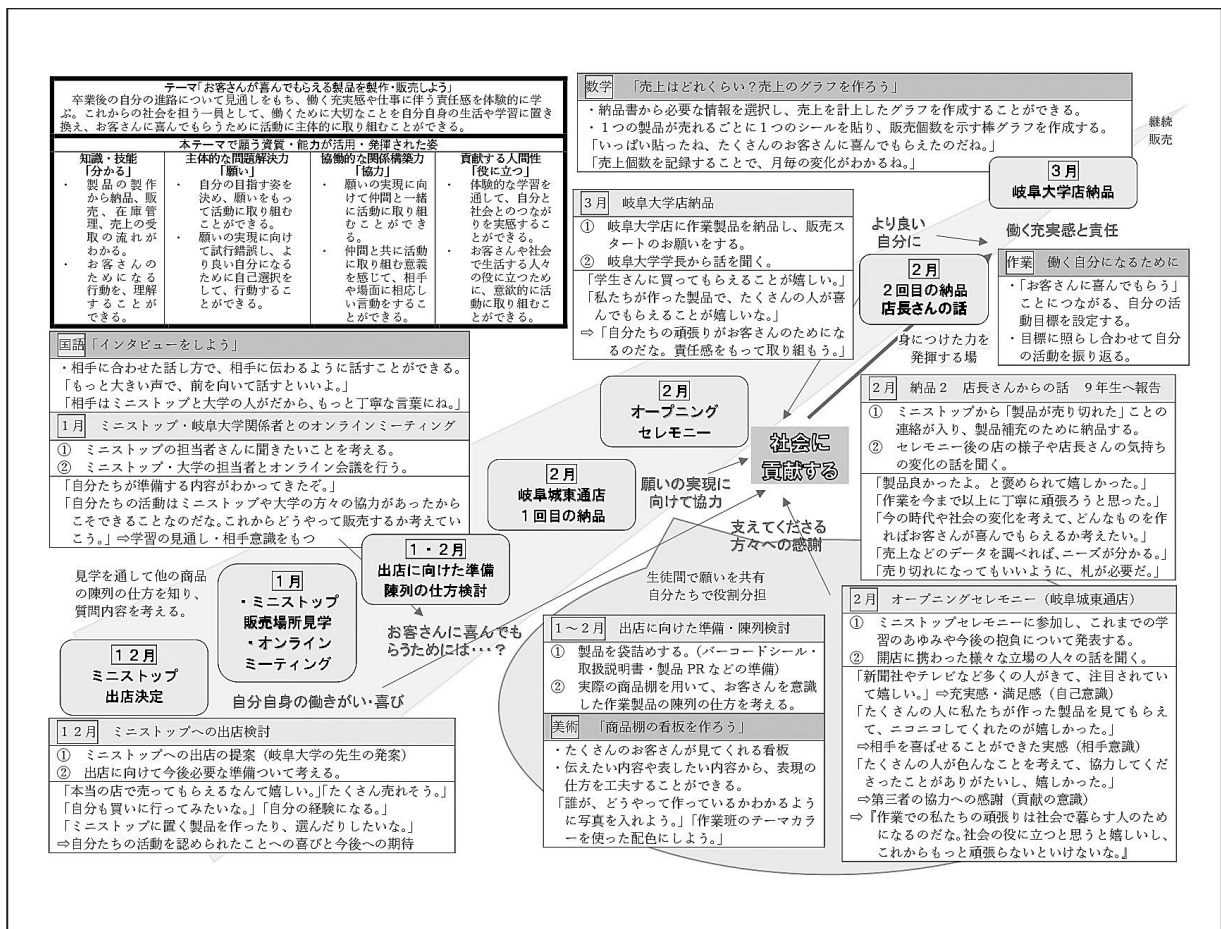


図4 「ミニストップ販売に向けて」学習の流れ

・初めてのことから、とても良い経験になると思
います。挑戦してみたいです。

自分達が作った製品が実際のお店の店頭で並ぶこと
は、嬉しさと同時に驚きがあった。この段階では、出
店の目的や活動に向かう気持ちは、自分自身の作業学
習におけるやりがいや、喜びなどの内的な動機による
ものであった。

6.3 社会に生きる人とつながり学習計画を立てる

販売に向けての活動が始まった。児童生徒は、自分
たちが学習を進めていく立場になると、販売に向けて
分からないことがたくさんあることに気づき、今後ど
うしていくと良いか、どんな学習が必要か考えた。

T:販売するにあたり、知りたいことはありますか？

S1: 製品はどうやって置くのかな？

S2:学校での販売の時には、製品を持って会計に並
んでもらうけど、ずっとミニストップに私たち
がいるわけにはいけないし・・・。

S3:お店に売っている商品はどうなっていたっけ？

T:では、これからどうすると良いでしょうか？

S1:実際にお店を見に行くのはどうですか？

S2:商品がどんな状態で売っているか見たいです。

S1:いつから販売スタートになるのかな？

S2:私たちが準備するものって何なのだろう？

S3:どんな人がお店を使うんだろう？

S4:売れた後のお金はどうなるんだろう？

T:分からないことがたくさん出てきたね。
では、これからどうしたいですか？

S3:ミニストップの人に質問してみたいです。

児童生徒の考えをもとに、ミニストップ・大学担当
者とのオンライン会議を行なうことになった。以下は
そのやりとりの様子である。

Q. どのような状態で製品を置けば良いですか？

A. すべての製品を袋詰めし、袋の上からバーコー
ドシールを貼ってください。袋の中には、製品と
製品の使い方の説明書を入れてください。説明書
には作った人、原材料、製品を使う上での注意事
項を書いてください。もし欠陥があった場合に誰
が作ったか分かるようにして、お客さんが安心し
て製品を使ってもらうためです。お店で販売する
製品の品質が、物によって違ってはいけません。
よりよい製品を続けて作ることが、お客さんの
信頼を得ることにつながります。

Q.ポップなどを作っても良いですか？

A.お客さんに皆さんの頑張りを知ってもらうため

のポップはとても良いと思います。商品の並べ方によ
ってもお客さんの反応は違います。ぜひ、たくさ
んのお客さんが見てくれるような商品棚を作って
くださいね。

ミニストップの方や
大学の関係者とのやり
とりを通して、販売に
向けた具体的な準備の
見通しをもつことがで
きた。販売をするミニ



ストップの方から、お客さんを大切にしたい製品の販売
の仕方、製造者としての責任を児童生徒たちに教えて
いただいたことで、相手意識をもって取り組むことの
大切さを再確認した。児童生徒たちは、学校外の方と
のやりとりに、とても緊張した様子であった。オンラ
インという形にはなったが、社会と人との関わりが児
童生徒の心の中に「しっかり取り組まないと。」とい
う緊張感や責任感が生まれた。

6.4 お客さんを意識しながら陳列方法を検討する

全ての児童生徒が、売り場の様子をイメージし、具
体物を用いて試行錯誤するための環境を作るために、
コンビニエンスストアで使われる商品棚と全く同じも
のを用意した。

実物を目の前にして、教師が「これからどんな準備
をしていくと良いかな？」と問うと、自分たちの生活
や販売場所見学の経験から次のように答えた。

- ・製品がいくらかわかるような表示があるよ。
- ・誰が作ったか分かるようにするといいと思う。
- ・どうやって製品を置くと良いのかな・・・。
- ・ミニストップの人が「製品は袋詰めをしてね。」
と言っていたよ。袋詰め準備もしないと。

商品棚への並べ方を検討する際には、どこにどの製
品を置くと良いかを、実物を用いて考えた。児童生徒
の考えが大切にしたことは次の通りだ。

「どうやったらお客さんが
見やすいかを考えて陳列
しました。お客さんの目線
に合うように、製品を斜め
にしたり、大きさのバラ
ンスを意識して、商品同士
が重なったりしないよう
に気をつけて並べました。」



店舗と同じ商品棚を用いることで、「もっとこうし
た方がいいよ。」と、製品をかけたフックを何度もか

け直して、遠くから見てみたり、近づいて見たりして試行錯誤することができた。

6.5 社会に生きる人からの評価を聞く

ミニストップ販売に向けた取組のまとめとして、岐阜大学やミニストップ関係者の立ち合いのもと、作業製品販売開始のオープニングセレモニーを行った。セレモニーでは、開店に携わった様々な立場の人々の話を聞くとともに、代表生徒が自分たちの学習のあゆみや今後の抱負について発表した。

僕たちの作業学習では、お客様が喜んでもらえるように、丁寧に製品を作ることを大切にしています。これからも、お客様が笑顔になれる製品を作るために、一生懸命取り組んでいきたいと思っています。

生徒達は、ミニストップに集まった関係者や報道記者やお客様の多さに驚いた様子で、自分たちの取

組みが、多くの人々によって支えられていることを実感した。様々な立場の方々からの、「この作業製品



いいね。これから

も楽しみにしているよ。」という温かい言葉は、今までの自分たちの取り組みの達成感を得ることや、これからの活動に責任をもって取り組むための更なる動機付けとなった。

オープニングセレモニーが終わった数日後、ミニストップ岐阜城東通店の店長さんから「商品が売り切れてしまいました。」との連絡を受けた。想像以上の売

れ行きで、すぐに在庫補充のために納品に行くことになった。その際に、店長から販売の反響と、店長自身の気持ちの変化を聞く



ニュースや新聞を見てたくさんのお客さんが来てくれたよ。最初に売れたのは「エコバッグ」だったよ。レジ袋が有料になったから、みんな必要としているのだろうね。これからは、何を作ったらお客さんが喜んでもらえるか考えるといいよ。

お店を開いて20年になるけど、みなさんの製品を見て、「これからもっと頑張らないと！」という気持ちになったよ。コロナで色々大変だけど、みんなの頑張りをみると元気がもらえたよ。

店長の話聞いて、児童生徒は、製品が褒められたこと、自分たちの頑張りで周りの人を元気付けられたことを大変喜んだ。また、売れたものとその要因を結びつけることで、「どんなものを作れば、より多くのお客さんに喜んでもらえるか」ということを考えるヒントを得ることができた。

岐阜大学店での販売に際しては、岐阜大学学長をはじめとする関係者の方の話を聞くことができた。

みなさんが作る製品は、どれも温かみがあって心がほっこりします。買った後に製品と製品PRを自分の部屋に飾っている先生もいますよ。素敵な製品を作ってくれて、ありがとう。これからも楽しみにしているね。

自分たちが作る製品が、お客さんを笑顔にしていることや、自分たちの活動が世の中の人々の役に立っていることを聞き取り、社会に貢献しているという実感を得ることができた。

6.6 単元末の生徒の意識

「お客さんのために」「お客さんに喜んでもらえるように」という言葉は、ミニストップに関わる企画や振り返りを行う時にも、作業製品を製作する時にも、児童生徒の言葉として頻繁に登場する合言葉となった。

これからの販売をどうしていくと良いかについて、単元末に話し合った際に、生徒が次のように話した。

売れているものは、もっとたくさん作らないといけないし、売れていないものは、製品の数を少なくすることも考えないといけないと思います。これからは、どんなものを作れば、お客さんが喜んでもらえるかを考えて、製品を作っていきたいと思います。良い製品を作れるように作業学習を頑張りたいです。

児童生徒は製作の先にあるお客さんの姿を思い浮かべて、活動することができるようになった。自分たちが学習に取り組む目的が、自分自身のやりがいや喜びだけでなく、喜んでくれるお客さんのためへと広がったことが分かる。また、社会に開かれた相手意識をもっているからこそ、製造者としての責任を感じていることが分かる。良い製品を作ることが、自分の喜びであり、お客さんを喜ばせることになり、社会貢献に繋がることを実感することができた。

7 各教科の学習内容と関連付けた学び

7.1 国語「インタビューをしよう」

担当者とのオンライン会議を前に、国語の授業として「インタビューをしよう」の学習を行なった。初め

て話す相手に対して、自信をもって話すことができるようになってほしいという教師の願いに加え、国語の授業として、「相手に合わせた話し方で、相手に伝わるように話すことができる」と、本時のねらいを設定した。質問したい内容を整理した後、実際にインタビューの練習をした。練習をしていく中で、仲間の質問の様子を見て、アドバイスし合う姿が見られた。

- ・もっと声を大きくしないと、伝わらないよ。
- ・原稿じゃなくて、前を見て話すといいよ。
- ・相手はミニストップとか大学の人だから、もっと丁寧な言葉の方がいいんじゃないかな。

相手意識をもった児童生徒たちは、話し方だけではなく、その際に使う言葉遣いまで考えた。原稿を見つめ直し、自分たちで修正・改善することができた。

担当者とのオンライン会議という、社会に生きる人とつながる具体的な場面が想定される練習であったからからこそ、自分たちがどんな話し方をすれば良いかを、児童生徒たち自身が考えることができた。

7.2 図工・美術「商品棚の看板を作ろう」

図工・美術の授業では商品棚の看板を製作した。オンライン会議でのやりとりから、「たくさんのお客さんが見てくれるような看板を作る」ということが児童生徒の願いとなった。美術の授業として「表現したい内容から、表現の仕方を工夫することができる」とねらいを設定した。看板の内容について検討する中で、「僕たちが作っていることが分かるようにすると良いと思う。」「どうやって作るか、お客さんにわかってもらえるといいな。」という意見から、校名が分かる掲示と作業の様子の写真と説明の入った看板を作成することになった。配色を考える際にも、自分たちの各作業班のイメージカラーを活用しようと考え、自分たちらしさが伝わるカラフルな掲示を作成することができた。

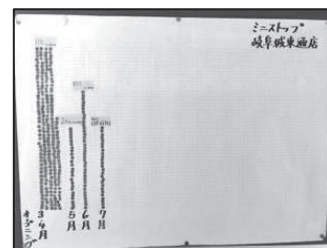
7.3 算数・数学「売上はどれくらい」

売上の記録は、算数・数学の授業で行っている。売上の記録を「見える化」することによって、全ての生徒が、自分たちの活動の成果が実感することができることを願った。算数・数学の授業として、「表から必要な情報を選択し、グラフを作成することができる」などと、1人1人の実態にあった目標を設定し、個別の支援を行いながら学習を行っている。

グラフを作る際には、売上金額ではなく、売上個数を記録することにした。作業学習の目的が、売上の最大化ではなく、生徒達の働く意義の理解にあるからである。そこで、売上個数は「買って喜んでくれたお客さんの数」として捉えることにした。

1つ製品が売れるごとに1枚のシールを貼り付け、販売個数がわかるように棒グラフを作成した。自分たちでシールを貼る活動を通して、「いっぱい貼ったね。たくさんのお客さんに喜んでもらえたね。」と、売れた個数とお客さんの姿を量的に理解することができた。

また、継続して毎月の売上を記録することによって、月毎の売上個数の変化を捉えることができた。シールの量を月ごとに見比べることによって、売上個数の増減を理解することができた。



8 児童生徒の変容

8.1 自己肯定感が低かった9年生A

私は、ミニストップで最初に売れたのがエコバッグと聞いて、とても嬉しかったです。これから、新しい柄とか作ったら、もっとお客さんが喜んでくれると思います。そのためには、作業の時に「疲れた。」とか言わないで、後輩の子が困っていたら、自分から助けてあげることが大切にして欲しいです。

これは、卒業を控えた9年生から下級生に話した言葉である。Aは、多くの失敗経験から、自己肯定感が低い生徒であった。初めての相手を前にすると、言葉が出て来なくなり、話す声も段々と小さくなってしまった。9年生になり、作業学習のリーダーとなったが、自分から仲間に声をかけることは苦手であった。自分で考え、願いをもつことができる一方で、新しいことに挑戦する場面では、自信のなさから、ためらって一歩踏み出すことができないことも多かった。

ミニストップでの販売に向けた学習では、教師の「どうしたら良いと思いますか？」という問いかけに対して「私は〇〇した方がいいと思います。理由は・・・」と、自分の考えを仲間に伝えることができた。陳列の仕方を検討する時にも、1つ1つの製品の置く位置と全体のバランスを何度も見直して、お客さんが見やすい商品棚を作るために、最後まで粘り強く取り組むことができた。だからこそ、製品が売れたことについての喜びは、今まで以上に大きかったのだと考えられる。販売の結果から、次の製作に向けて考えようとする姿や、自分たちの行動に置き換えて、願いの実現に向けて行動しようとする姿は、まさに、自分たちの活動を自分たちで作り上げようとする「社会の一員として主体的に参画する姿」であった。

安心して取り組むことができる環境の中で、自分た

ちの願いや考えに基づいて学習の進め、他者から認められたという成功経験が、自信をもって自分の思いを伝えられる姿につながった。

8.2 目的意識が見えなかった7年生B

本格的に作業学習が始まった7年生の生徒は、意欲的に活動に取り組む生徒がいる一方で、自分が関心のない活動や任された仕事に対して前向きに活動に取り組むことができない生徒もいる。これは、作った製品がどのような流れでお客さんの手に届くのか、自分の任された作業工程が製品を作る全体の流れの中で、どのような役割があるかを理解することが難しかったことが原因だと考えられる。

ミニストップでのオープニングセレモニーを終えて、自分たちの製品がお客さんの手に届く様子を知った後、7年生Bの取り組みの様子に変化があった。

- ・この製品は汚れているので、きれいにします。
- ・製品ができたから、次は袋詰めしないと。
- ・ミニストップに行って、僕が作った製品をお母さんに買ってもらいました！

それまでは、作った製品を置きっぱなしにしていたり、道具を雑に扱ったりすることがあったBであったが、製品や道具を大切に扱おうとするようになった。また、次の活動への見通しをもって、自分から取り組む姿勢が見られるようになった。教師から言われたことを行うだけではなくて、製品の製作過程や販売までの流れを理解して、自分で考えて行動することができるようになったのである。このように、お客さんの手に届くまでの出口を意識した学習を行うことで、自分たちが作った製品に愛着をもち、自分が消費者となって買う経験を通して、物作りのやりがいや、働くことの喜びを感じることができた。

8.3 意思表示が苦手だった8年生C

僕達が協力して作った製品をお客さんに使っただけのことがとても嬉しいです。働く嬉しさと同時に働くことの責任を感じます。これからの製品づくりや勉強を頑張っていきたいです。

これは8年生Cが岐阜大学店納品の際に大学関係者に話した言葉である。オープニングセレモニーの後、「ミニストップの人や岐阜大学の方、たくさんの方が協力をしてくださったことが嬉しかった。」と話したように、Cは自分たちの活動が多くの人によって支えられていることを実感し、社会の人々の支えに感謝の気持ちをもつようになった。実際の店舗で自分たちの製品が販売されることになったことで、校内だけではなく、社会に生きるより多くの人々の手に届くようになっ

た。作業学習での自分たちの頑張りは、社会に生きる人たちのためになること、社会の役に立つことが働く上での喜びになり、やりがいへとつながることを、身をもって実感することができた。

昨年度までは、学級で話し合う際に「どちらでも良いです。」と、自分の考えを意思表示することが少なかったCであったが、ミニストップ販売に向けた製品作りの際には、同じ作業班の仲間に対して「もっときれいにシールを貼った方がよいと思うよ。」「ツルツルかどうか、最後にはみんなで確認するようにしようね。」と、自分の願いを伝えることができるようになった。Cが自分の考えを、積極的に仲間に伝えようとする背景には、「どうすればより多くの人のためになるのか」という社会へ貢献しようとする意識であり、そこには自分たちの活動への責任感が伴っているのだと考えられる。

令和3年度9年生となったCは、小中学校卒業後の進路を考える時期になった。進学先について調べる学習では「僕は〇〇に行きたいと思っています。だから、その学校の作業学習について詳しく知りたいと思っています。」と話した。進路選択の際にも、自分の意思に基づいて自己選択・自己決定することができた。

9. 成果と課題

- 社会とつながる場を設定したことで、学習内容が実社会に反映され、評価としての結果が出ることで、学習に主体性が生まれるようになった。
- 社会とつながる場を設定したことで、自分自身の学習の姿勢を振り返り、責任感をもって学習に取り組もうとする態度が身についた。
- 製品の企画→製作→納品→販売→在庫管理→売上の受取の一連の流れを学習することで、どの活動においても、目的意識や相手意識をもって取り組むことができるようになった。
- 児童生徒が意思決定し、学習の進め方を考える主体的な学習を繰り返し、社会からの評価を受けることで、自己肯定感が生まれ、自己選択・自己決定する力をつけることができた。
- 願いの実現に向けた教科横断的な学習を行うことで、学習の必然が生まれ、断片的であった知識・技能が統合され、力を発揮することができた。
- 販売活動を通して、リアルな社会と関わり、社会参画を体験的に学ぶことによって、働く意義を「自分のため」だけではなく、「お客さんや社会の役に立つため」と今まで以上に広く捉えることができる

ようになった。

- 社会とつながる際に活躍する児童生徒は限定的になりやすいため、1人1人の活躍の場を明確にして、個々に応じた目標に合わせた教師の手立てを充実させていく必要がある。
- 社会から評価を受ける場面は児童生徒が成就感を得るために必要だが、偶発的に起こるものではないため、教師が意図的に位置付ける必要がある。
- 活動が続くにしたがって、活動の目的や相手意識が薄れていくことが予想される。売上データや他者の評価から、児童生徒が主体となる活動を更新していく必要がある。
- 児童生徒がリアルな社会からの要請を理解し、自分自身の力をつける必要を自覚することができるように、ミニストップでの販売に関わって、さらに各教科での学習内容を充実させる必要がある。

大きな成果と共に、次なる実践へとつなぐ課題も見つけることができた。企業や社会とつながるこの取組を、担当者の変更等によって単年で終わることのないように、持続可能な取組として継続することができるように、特別支援学級のカリキュラムや支援体制を確立していく必要があると考えている。

10. 最後に

ミニストップにおける作業製品の販売活動を通して、社会とつながる場を学習活動に位置付けることが、知的障害がある児童生徒が、社会の一員として主体的に参画する姿に繋がるのが分かった。社会とつながり、児童生徒が学習内容を構成し、自身の生き方を見つめるカリキュラムが、汎用的に様々な学校で実施されることを願って、今回の実践研究の報告を行っている。今回はコンビニエンスストアでの販売をモデルとして行ったが、地域社会で生きる人々の協力を得ることで、同じように実践することができると考えている。

附属小中学校の実践は、ミニストップ株式会社と岐阜大学施設課の共同事業であった。企業としては、CSR活動と事業活動が一体化したCSV (Creating Shared Value=共通価値の創造) の具体化に直結するものであり、社会的責任を果たすことへのPRにも活用することができる。持続可能な社会の実現に向けたSDGs目標8「働きがいも経済成長も」の取組としても当てはまる。学校の社会に開かれた教育課程に参加することは、様々な立場の人々にとって有益な活動となるのである。

学校の教育活動を支えてくださる様々な人々への感

謝の気持ちを忘れず、社会の一員として主体的に参画する姿を目指して、更なる実践を積み重ねていきたい。

《引用・参考文献》

- (1)文部科学省(2018)「特別支援学校教育要領・学習指導要領総則編(幼稚園・小学部・中学部)」, 第1章第1節改定の経緯より, p2.
- (2)文部科学省(2018)「特別支援学校教育要領・学習指導要領総則編(幼稚園・小学部・中学部)」, 第1章第3節小学部・中学部学習指導要領改訂の要点, pp.16~17.
- (3)須本良夫・干場康平・林賢太郎(2020)「9年一貫の教科横断的カリキュラムに関する研究(1)-創設期の岐阜大学教育学部附属小中学校の取り組みを通して-」岐阜大学教育学部教育報告人文科学第69巻第1号, pp.31-40.
- (4)松永 繁(2017)「日本におけるキャリア教育と課題-キャリア教育の先行研究からの検討-」敬神・研究ジャーナル, pp.34.
- (5)北村博幸(2016)「知的障害教育におけるキャリア教育の現状と課題」北海道大学紀要(教育科学編)第67巻 第1号, pp.107-115.
- (6)岐阜大学教育学部附属小中学校HPを参照 (<https://www.fuzoku.gifu-u.ac.jp/>)
- (7)浅賀崇史・豊吉章孝・福岡晶子・長尾亮(2020)「岐阜教育学校への移行に向けた取組」岐阜大学教育学部特別支援教育センター年報第27号, pp13~20.
- (8)文部科学省(2018)「特別支援学校幼稚部教育要領・小学部・中学部学習指導要領」
- (9)徳永 豊(2014)「知的障害教育の教育課程におけるキャリア教育の課題-教育活動全体を通じて行う指導をめぐる-」福岡大学人文論叢45巻第4号, pp.17.
- (10)川合宏之(2017)「特別支援教育と普通教育の狭間で-キャリア教育と療養-」HCS Journal 人間生活文化教育 No.27, pp.150-155.
- (11)松浦雄典(2017)「社会参加に生かす見方・考え方とは何か -第6学年のカリキュラムマネジメントを事例に-」全国社会科教育学会 第66回全国研究大会
- (12)猿渡正一郎「特別支援教育と教科教育の融合を目指した中学校社会科授業のモデル開発 -障害理解教育の視点をもとにして-」全国社会科教育学会口頭発表資料